卵のはなし

Sherwood Anderson, "The Egg"
翻訳：高野泰志

私の父さんはきっと、本来は陽気で親切な人になるはずだったのだ。三四歳になるまで農家の下働きをしていた。主人はトマス・バターワースという名のひとで、オハイオ州ビッドウェルの町のすぐ近くに農地をもっていた。父さんは当時、自分の馬をもっていて、土曜日の夕方になると町まで出向いて二、三時間ほど、ほかの下働き連中と交流をしていた。町ではビールを何杯か飲んで、ベン・ヘッドの酒場でぶらぶらする――その酒場は土曜の夜にはあちこちから下働きがやってきて混雑していた。みんなで歌を歌ったり、ジョッキをバーに勢いよくおいたりするのだ。一〇時になると父さんはまた馬に乗って、人気のない田舎道を家まで帰っていった。馬がぐっすり眠れるよう面倒を見てやってからベッドに入ることにしていたのだが、父さんは自分のそんな社会的地位にすっかり満足していた。あの頃は世の中でのし上がってやろうなどと考えもしていなかった。

母さんと結婚したのは、父さんが三五歳になる年の春だった。母さんはその当時、地元の学校の先生をしていて、次の年の春に、私が身もだえし、泣き声をあげながら、この世に生まれ出た。そのとき、このふたりに何かが起こった。ふたりとも野心をもつようになったのだ。世に出てのし上がろうという、アメリカ特有の情熱の虜になってしまった。

ことによるとこれは母さんのせいだったかもしれない。学校の先生などしているものだから、母さんは当然のごとく、たくさん本や雑誌を読んでいた。おそらくガーフィールドとかリンカーンとか、アメリカの偉人たちが貧困から身を立てて名声を築き、立派になった成り行きを学んでいたんだと思う。私が母さんのそばに寝ているとき――まだお産の床にいるあいだのことだが――ひょっとするといつの日か私が人の上に立って一大帝国を築くところを夢に見てたのかもしれない。とにかく母さんは父さんをそそのかして、今の下働きの仕事を辞めさせ、馬を売り払ったお金で自分たちだけの事業に打って出ることにした。母さんは背の高い無口な女性で、鼻は長くて、灰色の目は不安そうに揺れていた。母さんは自分のことは何も望んでいなかった。でも父さんと私のこととなると、母さんはどうしようもないほどの野心家だった。

ふたりが取り組んだ最初の事業はあまりうまくいかなかった。ビッドウェルから八マイルほど離れたところにあるグリッグズ・ロードで、痩せた石だらけの土地を一〇エーカーほど借りて養鶏業に着手したのだ。私はその土地で幼少期を過ごし、そこで人生がどんなものかという第一印象を植えつけられた。そもそもの始まりから破滅の印象しか受けなかったし、私自身、ずいぶん根暗な性格で、人生の暗い側面しか見ようとしなかった。それもみな、本来明るく楽しい少年時代を送れるはずだったのに養鶏場で過ごす羽目になったせいだと思っている。

そういったことに詳しくない人は、鶏にいったいどれほどたくさん悲惨なことが襲い掛かるのか全然知らないはずだ。鶏は卵から生まれ、二、三週間はちっちゃなふわふわの生き物だ。よくイースターのカードなどに描かれているようなやつだ。それからそのあと、皮がぞっとするほどむき出しになり、父親が額に汗して稼いだ金で買ったトウモロコシや餌をがつがつとむさぼって、ピップ［鳥の舌の伝染病］やコレラやなんだかんだと名前のついた伝染病にかかり、馬鹿みたいな目で太陽を眺めたまま突っ立って、病気になって死ぬ。雌鶏が何羽か、ときたま雄鶏も、神様の神秘的な目的に仕えるために生き残っておとなになる。雌鶏は卵を産んで、そこからまた鶏が生まれ、この恐ろしいサイクルはそうやって一回りする。なんとも信じられないほど込み入った話だ。哲学者ってのはたいてい養鶏場で育ったに違いない。みんな最初は鶏にとてつもない期待をかけるのだが、結局は恐ろしいほど幻滅することになる。人生の旅路に立ったばかりの小さな鶏は、利口そうで警戒心たっぷりに見え

るのだが、その実、恐ろしいほど馬鹿なのだ。あまりにも人間そっくりだから、鶏を見ていると自分の人生をどう考えればいいかわからなくなってしまうのだ。仮に伝染病で死なずにすんだとしても、このまま成長してくれるだろうとすっかり期待しきったところを待ってたかのように、いきなり馬車の車輪の下まで歩いていく――結局ぺしゃんこになって死んでしまい、神様のもとに帰っていく。若いうちはずっと害虫にたかられ、治療パウダーに一財産費やす羽目になる。私は年を取ってから、養鶏業で財産を築く方法について書かれた文献をたくさん読んだ。そういうのは善悪の知恵の木から実を取って食べたばかりの神様たちに読ませようと思って書かれたんだろう。そういった文献は希望的観測でしか書かれていないし、ただ野心さえあれば、雌鶏を何羽か手に入れるだけで大儲けができるのだと断言している。しかしそんなものを読んで道を踏み誤ってはいけない。そんな文献はあなたの役には立たない。アラスカの凍てつく山に金鉱を探しに行くのもよし、政治家の誠意に信頼を寄せるのもよし、なんだったら世の中が日々向上していくものであって善意は悪に打ち克つのだと信じるのもよし。でも雌鶏について書かれた文献だけは読んだり信じたりしてはいけない。あなたの役には絶対に立たないのだから。

すっかり脱線してしまった。私は別に雌鶏について語りたいわけではない。正確に伝えることができれば、卵が中心の話になるだろう。一〇年ものあいだ、私の父さんと母さんは必死になって養鶏場を軌道に乗せようとしたが、その後もう努力するのはあきらめてほかの事業を始めることにした。オハイオ州ビッドウェルの町に引っ越し、今度はレストラン業に着手したのである。一〇年ものあいだ、卵をかえすはずの孵卵器が卵をかえさないといっては心配し、ちっちゃな――それなりにかわいらしい――ふわふわの毛玉が半分皮をむき出しにした若鶏になって、そこからさらに死んだ雌鶏になっていく面倒を見た挙句、私たち家族は全部放り出して荷物をまとめ、馬車に乗せてグリッグズ・ロードをビッドウェルの方に下って行った。希望を込めた小さな幌馬車は新天地を求め、そこから人生行路を上向きに登っていこうとしたのである。

私たちはきっとみじめな様子をしていただろう。たぶん戦場から避難する難民みたいに見えたのではないだろうか。母さんと私は地面を歩いた。私たちの荷物を積み込んだ馬車は、隣人のミスター・アルバート・グリッグズにその日一日借りていたものだった。馬車の側面から安物の椅子の脚が突き出していて、ベッドやテーブル、台所用品を詰め込んだ箱を積み重ねた後ろには生きた鶏を入れた木箱が置いてあり、その上には乳母車が置かれていた。私が幼いころに乗せられていた乳母車だ。いったいどうしてこの乳母車にそんなに執着していたのか、私にはわからない。もうひとり子どもが生まれるなどということはなさそうだし、車輪も壊れていた。あまり物をもっていないひとというのは、少ない自分の持ち物に固執するものだ。それこそ、人生をこんなにもわびしくしてしまう元凶なのだ。

父さんは馬車のてっぺんに乗っていた。当時父さんは四五歳で頭も禿げ上がり、ちょっと太り気味だった上に、長い間母さんや鶏と生活を続けてたせいで、普段から無口で元気がなさそうだった。養鶏場で過ごした一〇年のあいだずっと、父さんは近所の農場でも下働きをやっていたし、稼いだお金の大半は鶏の伝染病を治す薬に使い果たしていた。ウィルマーのコレラ治療薬・白い奇跡だとか、ビドロー教授の産卵促進薬だとか、ほかにもいろんな薬剤を、母さんが養鶏新聞の広告から見つけてくるのだ。父さんの頭のちょうど耳の上あたりには、小さな髪の毛の断片がふたつ残ってた。今でも覚えているが、子どものとき、冬の日曜日の午後に父さんがストーブの前で椅子に座って眠り込んだときなど、私はその目の前に座って父さんのことをよく観察したものだった。当時、私はすでに本も読めるようになっていたし、自分なりの考えのようなものももつようになっていた。そんな私の空想の中では、父さんの頭のてっぺんを通って走る禿の道が広い道路になっていた。シーザーがローマから軍団を率いて、いまだ知られざる世界の驚異に向けて進軍するとき、作らせたような道だと考えていた。父さんの耳の上に生える髪の毛の房は、私からすると森だったのだ。なかば眠り込み、夢うつつ

の状態になると、私はその道路を進むちっちゃな生き物になり、どこか遠くの美しい国に行く夢を見ていた。そこには養鶏場などなければ、人生も幸せで卵なんか目にすることもなかった。

私たちが養鶏場を逃れて町へ行くときの話は、その気になれば本一冊でも書けそうだった。母さんと私はその八マイルの道のりを全部歩きとおした――そのあいだ、母さんは馬車から何も落っこちないように見張り続け、私は世界の驚異を眺め続けた。馬車の座席の父さんの隣には、父さんが一番大事にしている宝物があった。このことについても話しておこう。

養鶏場では何百も、いやひょっとすると何千もの鶏が卵からかえるのだが、ときどきびっくりするようなことが起こる。人間と同じで、卵からも奇形（グロテスク）が生まれることがある。そういう巡り合わせはそうしょっちゅう起こるわけではない――たぶん千回に一回くらいだろうか。鶏なのに、ほら、足が四本生えてたり、翼が二組あったり、頭がふたつあったり、そんなようなやつだ。そういうのはたいてい生き残れない。生まれてすぐに、たまたま手元の狂った造物主のところに帰ってしまう。そういうかわいそうな生き物が生き残れないというのが、父さんにしてみると人生の悲劇なのだろう。というのも父さんの考えでは、五本足の雌鶏とか、ふたつ頭の雄鶏とかを大人の鶏にまで育て上げられたら、それでひと財産作れるはずだった。父さんはその奇跡を郡の家畜品評会にもっていって、そこに来ている農家の下働き連中に見せて金持ちになる夢を抱いていたのだ。

とにかく、父さんは私たちの養鶏場で生まれたちっちゃな奇形の生き物をみんな保存しておいた。アルコールに漬けてひとつずつ専用のガラス瓶に入れておいたのだ。父さんはその瓶を慎重に箱に入れ、町に向かう旅の途中、馬車の自分の隣の席に置いて運んだ。片手で馬を走らせ、もう片方の手でその箱をしっかり押さえつけて。私たちが目的地に着くと、すぐさま箱を下ろして瓶を取り出した。オハイオ州ビッドウェルの町でレストランを営んでいたときはずっと、その奇形（グロテスク）はそれぞれ小さなガラス瓶に入ったまま、カウンターの背後の棚に飾られていた。母さんはたまに文句を言ったが、父さんは自分の宝物のこととなると頑として譲らなかった。この奇形（グロテスク）はね、と父さんは言い放った、値打ちものなんだ。人間ってものはね、見慣れない不思議なものを見たがるもんなんだ、そんなふうに父さんは言うのだった。

さっきはオハイオ州ビッドウェルの町でレストラン業を始めたって言っただろうか？　その言い方はちょっと大げさすぎたかもしれない。町自体が低い丘のふもとの、小さな川の脇にあった。鉄道は町の中を通るわけではなく、駅が一マイルほど北の、ピクルヴィルと呼ばれるところにあった。シードルの製造所と漬物工場が駅のそばにあったのだが、私たちがやってくる前にどっちも廃業してしまっていた。朝と夜にはバスが出ていて、ビッドウェルのメインストリートにあるホテルからターナーズ・パイクと呼ばれる道路を通って駅まで行く。私たちがそんな辺鄙な場所でレストラン業を始めようとしたのは、母さんのアイデアだった。母さんは一年ほどその話をし続けていて、ある日そこまで出向いて、鉄道駅の向かい側の空き家になった店舗用の建物を借りた。そこでレストランをやると儲かると考えたのは母さんだった。母さんに言わせると、旅行者は町から出る列車に乗ろうとすると、当然待ち時間があるだろうし、町のひとだってよそから到着する列車を出迎えるのに駅まで来るはずだという。そうしたらレストランに入ってパイをひと切れ買ったり、コーヒーを飲んだりするはずだろう、と言うのだ。今は大人になったからわかるのだが、母さんにはほかにもそこに行きたい理由があった。私の将来のことで野心を抱いていたのだ。母さんは私に世の中でのし上がってほしかった。だから町の学校に入学して、都会育ちになってほしかったのだ。

ピクルヴィルでも父さんと母さんはそれまでずっとそうしてきたように、一所懸命働いた。行ってすぐのころは借りた建物をレストランとして使えるように作り直す必要があった。それにひと月かかった。父さんは野菜の缶詰を置く棚を作った。そしてペンキで看板も作って、大きな赤い文字で自分の名前を書いた。自分の名前の下にははっきりとした命令調で「食事はここで（イート・ヒア）」と書いたが、その

命令に従うものはめったにいなかった。ショーケースを購入し、葉巻やたばこをぎっしりと並べた。母さんは部屋の床や壁を磨き上げた。私は町にある学校に通うことになったが、養鶏場や、そこにいるみじめったらしい情けない鶏どもから離れられてせいせいしていた。だからと言って喜びに満ちあふれた生活を送っていたわけでもない。夕方になると学校を出てターナーズ・パイクを歩いて家に帰ってくるのだが、その途中で子どもたちが町の学校の校庭で遊んでいる様子を思い返していた。ちっちゃな女の子の集団が片足跳びをしながら歌っていた。それを私もやってみた。凍てついた道路を歩きながら、私はまじめくさった顔で片足跳びで進んだ。「か・た・あ・し・と・び・で・さ・ん・ぱ・つ・や・に・い・こ・う」そう甲高い声で歌った。それから慌ててやめて、不安げにあたりを見回した。こんな浮かれた様子を誰かに見られたのではないかと恐れたのだ。きっとそのとき私が考えたのは、私みたいな人間にはこんなことをする資格がないということだった。なぜなら私は養鶏場で育った人間であり、毎日毎日死が身近にあったのだから。

母さんはレストランを夜も開けておくことに決めた。夜の一〇時に旅客列車が北に向けて私たちの玄関先を駆け抜け、その次に短距離の貨物列車が通る。貨物列車の乗員はピクルヴィルで荷物の積み替えをしないといけない。その作業が終わると、連中は私たちのレストランに来て、熱いコーヒーと食事をとる。たまにフライドエッグを頼む人もいた。朝の四時に連中は北に向けて帰っていくのだが、そのときにまた私たちのところにやって来る。そうやってささやかな商売がちょっとずつ軌道に乗り始めた。母さんは夜眠り、日中レストランを切り盛りし、父さんが寝ているあいだに下宿人たちに食事を出す。父さんは、母さんが夜のあいだ眠っていた同じベッドで眠り、私はビッドウェルの町に出発する。長い夜のあいだ、母さんと私が眠っているときに、父さんは料理をし、下宿人のランチバスケットに入れるサンドウィッチの下ごしらえをするのだ。そのとき父さんの頭に、世の中でのし上がっていくためのアイデアが急に浮かんだのだった。アメリカ特有の精神が父さんを捕らえた。つまり父さんもまた、野心家になったのだ。

夜は長く、することもあまりないので、考える時間はたっぷりあった。それが父さんの破滅の原因だった。これまで自分の商売があまりうまくいかなかったのは、自分があまり陽気にふるまわなかったせいだ、だから今後は人生に対して明るい見通しを抱いてやるのだ、そう父さんは決心したのだ。早朝、父さんは二階に上がってきてお母さんのいるベッドに入り込んだ。母さんは目を覚まし、ふたりで話し合いを始めた。部屋の隅にある自分のベッドで私もそれを聞いていた。

父さんの考えだと、母さんとふたりでレストランに食事に来たお客さんたちを楽しませるべきだと言うのだ。父さんがどんなふうにその話をしたのか覚えていないけれど、私の印象だと、なんだかひどくあいまいなやり方で、ある種の芸人になろうとしているように聞こえた。お客さんが、とりわけビッドウェルの町から若い人たちが、私たちの店に来てくれたら、まあ実際そんな機会はめったになかったのだが、気の利いた楽しい会話をもちかけるべきだと言うのだ。父さんの話しぶりから推測すると、陽気な居酒屋店主みたいなまねをしたいようだった。母さんは最初からずっとあまり真に受けている感じではなかったが、それでもその試みをやめさせようとはしなかった。父さんの目論見では、自分や母さんと一緒にいたいという熱意が、きっとビッドウェルの町の若者の胸に湧き上がってくるだろうということだった。夜になると陽気で楽しげな連中が歌いながらターナーズ・パイクを歩いてくるのだ。連中はきっと大声で浮かれて笑い声を上げながら、私たちの店に群がることだろう。歌とお祭り騒ぎであふれかえるのだ。いや、父さんがこのことをそこまで詳しく語ったというわけではない。父さんは前にも言ったように、無口な人だったから。「連中にはたまり場が必要なんだよ。きっとたまり場を欲しいと思ってるはずなんだ」父さんは何度も何度もそう繰り返すだけだった。そうするだけで精いっぱいだったのだ。あとのことは私が想像力で埋め合わせた。

二、三週間ほどたつと、父さんのこの考えは家じゅうに浸透していた。そんなに会話があったわけ

ではないけれど、日常生活でなるべく陰気な顔をする代わりに笑顔を浮かべるよう努力した。母さんは下宿人たちに笑いかけ、私はそれがすっかりうつってしまって、飼っていた猫にまで笑いかけた。父さんはなんとか人を喜ばせたいという熱に浮かされているようだった。間違いなく父さんの身体のどこかに、ちょっとばかり芸人魂が潜んでいるようだった。夜にやって来る鉄道会社の連中相手ならほとんど失敗することなく狙い通り笑わせていたが、早くビッドウェルの若い男女が来てくれて、自分の腕を見せつけてやりたいと心待ちにしているようだった。レストランのカウンターには針金でできたバスケットが置いてあり、そこにいつも卵をたくさん入れてあった。人を楽しませたいというアイデアが頭の中に生まれ落ちたときも、きっとそのかごが父さんの目の前にあったに違いない。卵と父さんのアイデアの発展とは、どちらもまだ生まれる前の段階にあるという点で共通していた。とにかく一個の卵が、それ以上人生が進行するのを止めてしまったのだ。ある日の深夜、私は父さんの発した怒りの怒号で目を覚ました。母さんも私もベッドに起き上った。母さんは震える手で枕もとのテーブルに置いてあったランプに火をつけた。階下ではレストランの入り口のドアが叩きつけるように閉まり、数分後に父さんが階段を、足を踏み鳴らして登ってきた。父さんは手に卵をひとつ持っていて、その手はまるで悪寒を感じているかのようにぶるぶる震えていた。その目はなかば正気を失った光を宿していた。私たちをにらみつけて立ち尽くしている様子から、私はてっきりその卵を母さんか私に投げつけるつもりなのだと思った。すると父さんはランプの脇のテーブルに卵をそっと置いて、母さんのベッド脇に膝をついた。そして子どものように泣きだした。私も父さんの悲しみがうつってしまい、一緒に泣きだした。二階の小さな部屋に、私たちふたりの鳴き声が響き渡った。ばかばかしい話だが、私たちの大騒ぎで覚えているのは、母さんの手が父さんの頭のてっぺんを通る禿の道をいつまでも撫で続けていたことだけだった。母さんが父さんに何を言ったのか、下の階で起こったことをどうやって話させたのか、すっかり忘れてしまった。父さんのした説明ももう何も覚えてない。ただ覚えているのは私自身が悲しくて怖かったことと、父さんの頭を通るあのつるつるの道が、ベッド脇にひざまずいているせいで、ランプの灯りに照らし出されて光輝いていたことだけだった。

下で起こったことはなんだったのか。どういうわけか説明はできないのだが、私はまるで父さんの大失敗を目撃していたかのように、そこで何が起こったかを知っていた。みんな年をとってくると、説明のできないことをたくさん経験するようになるものだ。あの日の夜、ジョー・ケインという、ビッドウェルの商人の息子がピクルヴィルまで父親を迎えに来ていた。父親は午後一〇時の列車で南から戻ってくることになっていた。列車は三時間も遅れていて、ジョーは私たちの店に入って暇つぶしをしながら列車の到着を待つことにした。短距離貨物列車が入ってきて、貨物の乗員が食事を食べて終えた。ジョーはレストランに父さんとふたりきりで残された。

私たちの店に入った瞬間から、そのビッドウェルの若者は父さんの行動に戸惑いを感じたに違いない。彼は自分がこんなふうに油を売っているせいで、父さんが腹を立てているのだと考えた。なぜなら自分がこの場にいることを、レストランの店主が明らかに嫌がっていることに気づいたのだ。だからすぐに店を出ようと考えた。しかし雨も降り始めていたし、町までの長い道のりを歩いて帰り、また戻ってくるなんて嫌だったのだ。そこで彼は五セントの葉巻を買い、コーヒーを一杯注文した。そしてポケットに入れておいた新聞を取り出して読み始めた。「夜の列車を待ってるんですよ。遅れててね」彼は弁解がましくそう言った。

ジョー・ケインはこれまで父さんに一度も会ったことがなかったのだが、父さんは長いあいだ、黙ったままじっとその客を見つめていた。間違いなく初舞台を前にしてすっかりアガっていたのだ。人生でよくあることだが、それまであまりにしょっちゅう、今直面しているこの状況のことばかり考え続けていたせいで、実際に向き合ってみると少々緊張してしまったのだ。

まずひとつには、父さんは両手をどこにおいていいかわからなくなってしまった。そして片手をお

ずおずとカウンターの向こうまで突き出し、ジョー・ケインと握手した。「初めまして」父さんは言った。ジョー・ケインは新聞をおいて、父さんを見つめた。父さんはカウンターにおいてあった卵のバスケットに目を止め、話し始めた。「えっと」父さんはためらいがちだった。「その、クリストファー・コロンブスのことは聞いたことあるだろ、な？」父さんは腹を立てているように見えた。「あのクリストファー・コロンブスってやつはペテン師だ」父さんはきっぱりと言い放った。「あいつは卵を縦に立たせると言った。そう言ったんだ、確かに約束した、それで実際にやって見せるときに卵の端を割ったんだ」

父さんが客に見せていた態度は、クリストファー・コロンブスのごまかしに逆上しているみたいだった。ぶつぶつと文句を言ってののしるのだ。そしてクリストファー・コロンブスが立派な人物だと子どもに教えるのは間違いだと言い放った。だってあいつは肝心のときにごまかしをやったんだ。あいつは卵を縦に立てると断言しておきながら、実際やって見せろと言われるとペテンにかけたんだ。いまだコロンブスに文句をつけながら父さんはカウンターのバスケットから卵を取り出して、うろうろと歩き始めた。そして卵を両手の手のひらにはさんで転がした。愛想よく笑いかけながら。父さんは人間の身体が発する静電気が卵にどういう影響を与えるか、ぶつぶつと説明をし始めた。そして殻を割らないでも、両手にはさんでごろごろ転がすだけで卵を縦に立てることができるのだと断言した。父さんの説明では、手のぬくもりと、卵を優しく転がしてやるときの動きで、卵に新たな重心を作り出すことができるのだと言う。ジョー・ケインはちょっとだけ興味をひかれた。「俺はこれまで何千もの卵を扱ってきた」父さんは言った。「俺ほど卵に詳しいやつはいないんだ」

父さんはカウンターに卵を立てたが、すぐに倒れてしまった。父さんはその技を何回も何回もやってみた。毎度のように両手の手のひらに卵をはさんで転がし、電気の神秘と重力の法則についての説明を繰り返した。三〇分もその努力を続けた末に、一瞬だけ卵を縦に立てることに成功し、顔を上げると、客がもうこっちを見ていないのに気づいた。ジョー・ケインに呼びかけて、自分のこれまでの努力が成功したことにやっと注意を向けてもらった途端、卵はまたしても転がって横向きに寝転んだ。

芸人としての熱意に火がついて、そして自分の最初の試みが失敗に終わったことに狼狽し、父さんは鳥の奇形を入れた瓶を棚の所定の場所から降ろしてきて、客に見せ始めた。「こいつみたいに脚を七本、頭をふたつもってみたいかね？」父さんはそう聞いて、自分の宝物の中でも一番珍しいのを見せた。満面の笑みが広がっていた。そしてカウンター越しに手を伸ばしてジョー・ケインの方をぴしゃっと叩こうとした。若いころまだ農家の下働きだったときに土曜の夜、町に馬で出かけて、ベン・ヘッドの酒場で男たちがそんな振る舞いをしているのを見たことがあったのだ。その客はひどく変形した鳥が瓶の中でアルコール漬けになって浮いているのを見て、少し気分が悪くなり、立ち上がって出て行こうとした。父さんはカウンターから出てきて若者の腕をつかみ、もう一度席に座らせた。ちょっと腹が立ってきていたので、しばらくのあいだ顔をそむけて無理やり笑顔を作らなければならなかった。それから瓶をまた元の棚に戻した。父さんはほとばしるような気前のよさでジョー・ケインをうまく説き伏せ、自分のおごりだからと言ってコーヒーをもう一杯と葉巻をもう一本出してやった。それから鍋を取り出し、カウンターの下においてあった壺からヴィネガーをたっぷりと注ぎ込み、新しい技をやって見せるつもりだと宣言した。「この卵を鍋のヴィネガーで温めるんだ」父さんは言った。「そしてこの卵を殻を割らずに瓶の首に通してやる。いったん卵が瓶に入ったら、もとの形に戻るし、殻ももとどおり硬くなる。そうしたら卵の入ったこの瓶をあんたにやるよ。どこへ行くときももって行ったらいいんだ。みんなどうやって卵を瓶に入れたのか知りたがるだろう。でも言ったらだめだぞ。あて推量させておくんだ。それがこの技の楽しみ方なんだよ」

父さんはにっこり笑って客に向かってウィンクをした。今自分が対面しているこの男は軽く気が

狂っているんだろう、でも害はなさそうだと、ジョー・ケインは判断した。そして出してもらっていたコーヒーを飲み、また新聞を読み始めた。卵がヴィネガーで暖められると、父さんはスプーンにのっけてカウンターまで運び、奥の部屋に行って空き瓶をもってきた。せっかく自分が面白い技をして見せているのに客が全然自分のほうを見ていないのに、父さんは腹を立てていた。でもとにかくいそいそと作業に取り掛かった。長い時間をかけて、なんとか卵を瓶の首に通そうと格闘した。父さんはヴィネガーの入った鍋をもう一度コンロにかけて卵を暖めなおした。そして卵をもちあげようとして指をやけどした。二度目に熱いヴィネガーで熱すると、卵の殻はちょっとだけ柔らかくなったが、それでもまだ瓶の首を通るほどではなかった。父さんは根気よく作業を続けたが、それはどうしてもやり遂げないといけないという焦りで必死になっていたからだった。やっとのことでこの技もうまくいきそうだと思ったとき、遅れていた列車が駅に入ってきたので、ジョー・ケインは何も考えずに立ち上がって出て行こうとした。父さんは最後の必死の努力で卵に打ち克とうとした。レストランに入って来た客を楽しませるコツを心得ているという評判を勝ち得る瀬戸際の勝負だったのだ。父さんは卵を攻めたてた。いくぶん無理やり押し込もうとした。ののしりながら汗が額に浮かんでいた。すると卵は父さんの手の下で割れてしまった。中身が服に飛び散ったとき、ちょうどジョー・ケインは入り口のところで立ち止まったところだったのだが、振り向いてその様子を見て笑った。

怒りの怒号が父さんの喉からほとばしり出た。地団太を踏んで意味不明のことばを喚き散らした。カウンターのバスケットから卵をもうひとつ掴むと、それを投げつけたが、その若者がひらりとドアを通り抜けて逃げ出したので、わずかのところで頭には当たらなかった。

父さんは手に卵をもったまま、二階に上がって母さんと私のところに来た。父さんがどうするつもりだったのか、私にはわからない。私の想像だと、父さんは卵をなんらかの方法で割ろうとしていたのだと思う。卵全部を割るのだ。そして母さんと私にその破壊にとりかかるところを見せようとしていたんじゃないだろうか。でも母さんのいるところに来ると、変化が起こった。さっき説明したように、父さんは卵をテーブルにそっと置いてベッド脇にひざまずいた。そのあと父さんはその日の夜はレストランを閉めることにして、二階に上がってきてベッドに入った。そのとき、父さんは灯りを吹き消して、長いあいだひそひそ話をしてから、父さんも母さんも眠りについた。私も眠ったのだと思うが、あまり深い眠りにはつけなかった。夜明けに目を覚まし、私はテーブルにおいてある卵を長いあいだじっと見つめていた。いったいどうして卵は卵じゃないといけないんだ、どうして卵から雌鶏が生まれて、その雌鶏がまた卵を産むんだ、私はそんなことを考えていた。その疑問は私の血管に入り込んでしまった。それ以来ずっと血管を流れている、だって私は父さんの息子なのだから。とにかく、その問題は私の心の中でいまだ解決していない。そして結論を言うと、それこそが、卵が完全に最後まで勝利を収めたことのもうひとつの証拠でしかないのだ――少なくとも私の家族に関する限りは。